

14

明治初期日本の民衆への医療情報の普及

—大阪・道修町の画作者・松川半山の人体像—

月澤美代子

順天堂大学医学部医史学研究室

1. はじめに—大阪・道修町の画作者・松川半山—

松川半山（まつかわ・はんざん、文政元年～明治15年、1818–1883）は、幕末から明治初年の大阪・道修町に住んだ売れっ子のイラストレーターだった。常に「締め切り」に追われていたが、生活はつましく庶民的であり、副業として道修町の町筋に小商いの店を営み「紫蘇味噌」などを売っていた。江戸期、大阪には800以上の出版人がいたとされ、上田秋成などの戯作者による、浪華の市井に住む庶民たちを対象にした安価な読み本が大量に出版されていた。戯作者の読み本には挿絵が付きものであった。幕末期の浪華で活躍した戯作者、暁鐘成と組んで『浪華のにきはひ』などを出版していた半山の活動場所は、明治維新とともに、開化啓蒙書、さらには、近代公教育制度の導入に伴う初等教育用の教科書へと移っていくが、この時期の多くの挿絵画家と同様、半山は、単に挿絵を提供したばかりでなく、画作者として自ら多くの「画（絵）入り本」を執筆している。

2. 文明開化と伝統的な内臓観

1876（明治6）年2月、大阪で出版された松川半山著『小学画引 人体問答』には、市井に住む庶民たちの日常的な身体が生き生きと描き出されている。第一章冒頭には、文明開化の洋服姿の少年の姿を真ん中に、次のような格調高い文章が綴られている。

人は天地の間に於て如何なる者なりや委しく承りたし
人は万物の霊にして動物の上に位して其体の組織細密にして智力も勝れて尊きものにして
男女とも之を人と称するなり

描かれているのは、たしかに男子だが、ここには、それまでの男・女、あるいは、武士・商人といった社会的な細かい違いを超越した、新しいカテゴリーとしての「人間」の定義が、高らかに宣言されている。

1876（明治9）年とは、1872（明治5）年から刊行開始されていた福澤諭吉の『学問のすすめ』全17巻が完結した年である。「万物の霊・人間」というフレーズは、まさにこの時代の流行語大賞といった勢いで巷に流布していたが、「男女とも之を人と称する」という宣言は、他の「人体問答」書には見られない、この『小学画引 人体問答』のみの特色である。

しかし、この半山の文明開化モードは、人体内臓を扱う第五章になると一転して伝統的な世界に戻っていく。こじんまりと描き出された「脾」「肝」「三焦」などの五臓六腑が、「心は（中略）即ち 苦を好む神明を出し衆理を具備ふ」といった説明を伴って並んでいるのである。

3. 内臓の西洋化—劇的な転換と内的な意識—

1年の間に、半山の伝統医学的な内臓図は大転換を遂げる。1876（明治9）年12月に著作権免許を受けた『小学人体問答』には半山の描き出す西洋解剖学的な人体内臓図が精密な銅版画として掲載されている。研究熱心な半山の学習の成果だが、半山の内的な意識は、この転換によって、どのような影響を受けたのだろうか。それとも、何も変わらなかったのだろうか。本発表では、1876（明治9）年における、この、浪華の庶民・松川半山の描き出す人体内臓図の劇的な転換と内的な意識との関連・無関連の分析を検討の対象とする。

本研究はJSPS 科研費21500982, 24501249の助成を受けたものです。